

『法華経』と現代——池田SGI会長の思想

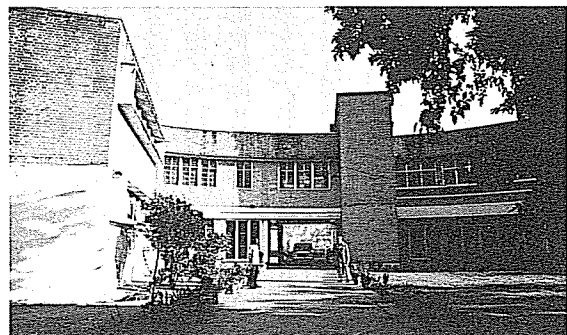
ロケッシュ・チャンドラ
栗原淑江 訳

二十世紀は今や、文明の袋小路に立っている。進むべき方向を模索し、意識のシンボルや智慧への道を求め、全体性への飛躍を目指し、共鳴による多様性への統合を探究しつつある。池田SGI（創価学会インタナショナル）会長は、時間を超越した無限の対話へとわれわれをいざなってくれる。その対話は、思索から覚醒へ、ドグマから対話へ、イデオロギーから理念への変換をもたらす。生命の岸辺に集まった小石は真珠のように磨かれ、われわれがこの小石を心の中に持ち帰るとき、小石は「意識の海」に溶け込むだろう。

『法華経』の無数の偈をひもとき、その特質を理解しようとするとき、池田会長の言葉が、われわれの心の静寂さと「空」を呼びさまし、一人一人の世界に、より大きく偉大な世界を入り込ませてくれる。また、われわれを失望させ、悩ませ、消耗させてきた対話について省みるとき、池田会長が、きらきら輝く水を宇宙のリズムと文明の流れの中で蘇らせ、人間を内的に統一させながら、つねに変化し成長しゆく統一体へと発展させてゆくのがわかる。

今世紀の終末期にあつて、加速度的に進歩するテクノ

ロジーは自然と食物の源泉を破壊し、物質的な蓄財が非常に重んじられ、外見だけに関心がもたれ、汚染が行われている。来るべき世紀は、このような不正な事態がもたらす苦痛をくいとめなければならぬ。そうすれば、人間の内なるシステムが、あらゆる地域の人々に役立つ新たな価値を生み出すための、よりよい選択肢を提供することができるだろう。



筆者が理事長を務めるインド文化国際アカデミー

う。その選択肢とは、多面的な可能性、生活様式への深い認識、森羅万象の壮大な相互作用といったものである。創造的なシンボルは、人々を共通の精神的覚醒に気づかせるために、また、現代の諸価値を超えた調和をもたらすために、人

間の「知識」を最大のものとするものでなければならぬ。われわれが必要とするのは、創造のプロセスを全体の価値体系に統合させる作用をもつ「触媒」なのである。ここで、ヘーゲルの「理性の巧智に気づけ」との言葉が思い起こされる。

創造性は神秘なしには存在できない。神秘は創造に本来そなわるものである。それは個人的な探究であり、存在以前の状態の発見であり、曖昧さと幻想の超越であり、より完全な真理への目覚めである。そしてそれは、われわれを普遍的な秩序へと開放するものである。単に自然を理解し統御するだけでなく、そういったことを乗り越えるためには、自然の隠された秘密を持続的に探究しなければならないと同時に、また、驚くほど複雑な意識の領域を明らかにしなければならない。創造性は、人間と森羅万象とを統一させるものであり、自然を征服したり支配したりするよりも、むしろ自然に溶け込み調和させるものである。

今世紀にみられた、直線的で、实际的で、唯物主義的な諸領域は、兆しつつある曙光の中で、普遍的・統合的・

瞑想的・律動的・覚醒的なパターンを探し求めている。
J・R・オッペンハイマー(J. R. Oppenheimer)は、永遠の世界を、理解しえない多様性として語っている。その説を妥当とはいいがたいが、否定もできない。すなわち、「過去のいつの時代においても、非常に一義的で単純な解釈があり、多くの詳細なことがそれによって理解されてきた。われわれは、これが人間と自然にとって必然的な真理であるという信念をもっているのであろうか。われわれはそれを発見する機知をもっているとさえいえるのであろうか。いくつかの風がわりな理由のために、その二つの質問への答えはイエスである」と。それは、池田会長が説く『法華経』の「慈悲の浄土」、「宇宙的ヒューマニズム」と響き合うものである。それは、生命という川の二つの岸の間を流れるきらめきであり、人間を超えた存在へと人間を変えてゆくものなのである。

「内なる仏性」への回帰

池田会長は、生活における物質的な豊かさ、超意識という財宝の調和を探索している。それは、深遠な『法

華経』に示される喜びと歓喜、勝利と荘厳さ、敬虔な畏怖と不思議さにおいて実現するだろう。意識の変容は信仰によって体験される。すなわち、『法華経』のただ一つの偈であつても、それを黙想する人は誰でも、神々を含むあらゆる世界によって「如来(Tathagata)」として認識されるのであり、その人は、如来として荣誉を受けるべきなのである。「法華経寿量品第十六」には「衆生所遊樂」とある。日蓮は述べている。「遊樂とは我等が色心依正ともに一念三千・自受用身の仏にあらずや」と。

未来のために『法華経』の智慧を探究する池田会長は、「法華経は、われわれ自身が仏であるという真理に至る旅である」と述べている。「如来蔵(Tathagata-garbha)」を修養し具現化することによって、あらゆる空理空論は矮小化され、揺るぎない忠節と信念が駆り立てられ、感動的で深遠なるものが活性化される。池田会長は、人間自身の内部と世界を調和させるような新たなレベルの覚醒が、『法華経』の静寂と沈黙のうちに出現することを予見している。そのように予見すること自体、かれは経典

に書かれた「如来の使(Envoy of the Tathagata)」であるといえる。かれは、世界の塵を振り落とすような、永遠の経典に期待しているのである。

『法華経』でしばしばみられる譬えに、「衣裏珠の譬え」がある。これは、変化しゆくあらゆる現象の背後にあってそれを超える、純粹で不変の「内なる仏性」への回帰であり、内在する存在を超えるものへの回帰である。

「内なる仏性」について聞いたり、それに触れたりすることはできないが、それは形をもたずに存在する。「永遠の無」に価値をおく人々は、人間の営みを行う際に、文化的・政治的・精神的・社会的に墮落することがない。中庸と緩やかな発展は、成長のしすぎや、性急さ、自然・人間・自身の搾取に対する解毒剤である。

人間は、発展によって満たされるべき空虚な器であるうか。あるいは人間は、空虚な沈鬱さの中に宙づりになっている孤独な月であろうか。人間は、その卑俗な言葉を「すずり」から洗い流し、どこかで失ってしまった思想と精神を蘇らせ、汚れを消滅させ、心身を透明に純粹なものにしなければならない。

北宋の偉大な詩人、蘇軾は次のように述べている。

「今日、山頂に登ったとき、私自身と世界はたちまちのうちにすべて忘れ去られた。永遠の風が私の頭を撫で、髪をからませたそのとき、私はその神秘を知った」と。

われわれは、この世界を獅子吼をもって目覚めさせなければならぬ。それは、「法華経勸持品第十三」の「我身命を愛せず 但無上道を惜しむ」の文に示される不撓不屈の努力という理想と一致するものである。日蓮は「経典を身で読む」と述べている。池田会長こそ、そうした人間であり、経典における「斯の人」なのである。すなわち、「日月の光明の 能く諸の幽冥を除くが如く 斯の人世間に行じて 能く衆生の闇を滅し」と。

池田会長は、来るべき現実のレベルを示し、それらを超えたものを指摘し、さらに、いつの日か直接的な体験という水準の上で明らかにするであろう現実を示すシンボルを明らかにする。シンボルは聖なる特質である。それらを理解するものは、自らを客観的世界へと開放すると同時に、個人的状況を脱して普遍なるものへと到達す

るのである。その体験は、現実的かつ超越的な、魅惑的な畏敬の体験である。体験とシンボルは、生の根源の意味を共有している。体験とシンボルは、説明や分析を切り分けるダイヤモンド（金剛）であり、真の創造的なレベルに到達させるものである。よく知られた智慧の完成者である玄奘の中国語訳によれば、「能断金剛（*Vajra-clethick*）」ということである。

象徴化をしたり理性的に思考したりするためには、体験と認識を持続しながら、概念を構成し、制度を案出することが要請される。人間社会は蜘蛛の巣である。ある箇所に分れると、あらゆるところに振動が伝わるのである。今世紀のポスト・古典的な科学パラダイムが力を失う中で、人類は価値への感性や未来の創造性、全体性を求めている。生命のもつさまざまな特質は、統制不可能な成長、汚染、疎外、種の衰退、思想操作、意識の麻痺といったものの除去を求めている。

新たな秩序が創出されつつある現在、パラダイムの転換の中で、『法華経』は文化への感性や参与といった特質を提示するだろう。そこでは、合理主義が束の間のも

のとなり、硬直さが流動的なものになり、一義性が多様性になり、エリート主義が参与主義になり、還元論的な分析が全体性になる。われわれは自由を必要とし、また、機械的な生活様式への従属を否定する意味と感情を必要とするのである。

釈尊は、生命の至高の跳躍を求めて自らの王国を後にした。将来、太陽系やさらに遠い宇宙を調和させ、われわれの内なる自己を安定させ、生態系、人間社会と組織を活性化させるものとして、原初的な仏性が知覚されるだろう。人類の精神的遺産と物質的な遺産は、二つの世界に分裂しており、両者はバランスを欠いて相互に闘争している。

歴史の千年の節目にあたって、われわれは、精神を拡張し軋轢（あつち）を解決するために行動する必要がある。われわれは、キケロ（*M. Tullius Cicero*）がローマの元老院での演説で述べた苦悶に満ちた言葉を忘れてはならない。

——「カティリナはローマの門前にあり。しかるに汝等は悠長に熟慮中である」と。同様に、池田会長は、今や洞察とビジョンと真理に根ざした行動を起こすべきとき

だということを思い起こさせてくれる。

人間は宇宙の中で独特な立場にある。というのも、人間は文化的価値のある世代から次の世代へと受け継ぐことができるからである。それによってわれわれは、今までのところではほとんど知覚されていない、流入と流出の際におこる電磁波のマイクロレベルの汚染を締め出したることができる。池田会長は、人間の生命とその働きを支配する根源的かつ偉大な存在への注意を喚起する。それは、集合的無意識に根ざした、個人の超意識の深淵から湧き出るものである。あらがいがたい歴史の進行の中で、精神的・社会的諸力を否定しようとする「ドラゴン（竜）」を打ち負かすことは、若き英雄の仕事である。その英雄は、年ごとに、世紀ごとに、そして千年ごとに絶えず誕生する。かれは、再活性化しつつある統合体の中であって、永続的に輝きわたる真のダイヤモンド（金剛）なのである。

生命とは、生き活きた不壊のエネルギーと宇宙の力という二つの川岸にそってつねに動く、持続的な流れである。池田会長は、迫りくる世紀のために、生命エネルギー

ギーの持続的な流れの栓を抜き、森羅万象に内在する精神的な源泉を開放した。その内なる我、内在する実在は、世界意識が成熟した際の多様性の基礎となる調和を具現化したものである。池田会長の感銘深い言葉によれば、『法華経』は、自己と世界の変革のための「ゆりかご」であり「子守歌」なのである。

自らを変革することによって、われわれは世界を変革することができる。意識の変革は思想を変革し、思想の変革は行動を変革し、行動の変革は社会を変革する。それらが統合されるのは、意味と自由を感じるような生の様式の中においてである。あるいは、バッハ（*J. C. Bach*）の言葉でいえば、「適切なときに適切な音譜がおかれれば、楽器は自ら演奏を始める」のである。池田会長は、二十世紀末にあつて、新たな革新の発端を感じ取っている。それは、消費主義を超えた創造的経済へ、普遍的文明へ、そして精神的時代へ、統合的世界と宇宙的哲学への転換である。

相互に無限に連結した森羅万象の中にあつて、所与の共同体は、一定の相互関係を選択することによって知覚

し、活動している。無限の森羅万象は陰極であり、人間の知覚的意識はそれを受け入れる陽極であるといえる。受け入れる装置は、精神的フィルターである。こうした精神的「グリッド」⁽⁸⁾は、われわれを保護するものである。それは、森羅万象が浴びせてくる情報がわれわれの意識に届きすぎるのを防ぐ役割を果たしている。われわれは、相互に関連している森羅万象の全体の中で生きることができない。限定された世界で生きなければならぬのである。

生命の特質は、成長を続けることであり、拡張することであり、変化することである。われわれは境界を硬直化させず、柔軟にたもっておかなくてはならない。持続的变化は生命の徴であり、進化する生物の健全な状態であると同時に、意識を共有する共同体を強化するものでもある。自然は異質なものととの統合を求める。精神の「ラチス（格子窓）」にもかかわらず、われわれは意識のダイナミズムを求める。われわれは進化し、意識の内容のグリッドとメタ・グリッドを操作するのである。われわれは、グリッドからグリッドへ、スーパー・グリッドから

メタ・グリッドへと移行するが、それらは決して無限の宇宙に匹敵するものではない。われわれは動き、前進し、伝達し、創造する。そして、われわれの問いは永遠のものであり、無限のものであり、時代と場所を超えたものであり、さらにわれわれ自身さえも超えたものなのである。

時間性と超時性を補完しあう思想

今世紀には、統制不可能な発展、消費社会、唯物主義的政治論、精神の過少評価といった現象が引き起こされた。こうした過度の発展は、聖なるものの知覚という超越的な「第二の現実」をもたらしてきた。今世紀が閉じようとしている現在、啓蒙的な理性主義の「第一の現実」と、超越という「第二の現実」が、人間の価値ある状態において調和することの重要性がいわれはじめていく。事実についての価値は、われわれが何であるかを示す。それはわれわれの価値体系であり、「存在する価値（*being values*）」である（ラテン語の *esse* は「is」を意味する）。それに対し、理想的な価値は、われわれがどうあるべきかを

示す。それは「あるべき価値（*esse values*）」である（ラテン語の *esse* は *ought to be* を意味する）。両者とも、意識の満ち引きのなかに存在するものである。

つねに革新する科学技術と、つねに永遠を志向する信仰は、確信をめぐる二つの様式である。すなわち、人間の全体性であり、人間の勇気であり、生物との共存である。われわれは、生活と学習、信仰と活力、ダイナミックなエネルギーと神聖なもの、エキサイティングな次元と有機的な本質、自然のままの人間の応答と共鳴、思索と愛の全体において、意味のあるものを求めている。

古典物理学の唯物論的な基盤はもろくも崩れ去った。科学自体が、物質はエネルギーであり、結果と同様にプロセスにも価値があることを証明してきた。そして、宇宙の非物質性を主張してきたのである。科学文化と人間文化という「二つの文化」の出会い、規範的なビジョンを復興するだろう。そして、新たな世紀における「理解の科学」の基本原則となるだろう。それは、量（大きさ）と質（価値）が自然という根源において共存しているという、古来からの認識に新たな意味を与えるだろう。

人間の努力は、人道主義的な責任を免れることはできない。努力すればするほど、共通の結論に達するだろう。

宇宙を論じるためには、人間の意識と行為の統合的な中心が必要である。

池田会長は、そうした世界を、美、高貴な秩序、宇宙的ヒューマニズムとよぶものへの献身といった形で心に思い描く。この点において、われわれは、あらゆるものの相互関連性を明らかにするために、「世界の感覚中枢（*world sensorium*）」（オリバー・L・レイサー Oliver L. Reiser の命名による）を発展させることができる。そこでは、グローバルな社会が、その内部に個人としての存在を見出すのである。有機的な宇宙秩序においては、孤立したシステムは一つもない。だれもが孤立した島ではないのである。

池田会長の思想は、時間性と超時性を補完しあうものであり、歴史と永遠性を補完しあうものである。どちらも、人間が生を理解する際のやり方の一つである。表面の意識および底知れず深い潜在意識は、われわれが内なる眼という隠れた潜在的をもっていることを示すもので

ある。

自然界のバランスは、人間的な諸価値にとつての本質的な基盤である。そのバランスは不斷の変化であり、変化する諸力の整序である。自然の共同体は、使用したエネルギーを自然に返す方法を知っている。それぞれの有機体は、自然がもつ自己回復という建設的な過程を維持する役割を果たしているのである。緑の植物は、植物連鎖の中で、空気、水と土から有機的な物質を生産し、大地にとつて有効な成分を戻している。人間も、森羅万象の中で発現したものである。人間は、土をおおう苔や草木、平地や丘を美しくする低木や樹木、さえずる鳥やぶんぶんなる昆虫、はい回り走り飛ぶ動物たちと同類のものなのである。

人間は、しだいにエネルギーの力を使いこなすようになり、植物や動物を支配するようになった。自らの意識に気づいている点で、人間はタイム・バインダー⁽⁹⁾である。人間は、存在するものを鉱物界、植物界、動物界の三つに階層化し、ヒエラルキーをつくり出した。長い歴史の道のりは、人間の意識の流れであり、地球を変えるため

の力と能力の流れであった。今日、人間は「存在することとは関係しあうこと」であり、生命にとっては「厳密な知性の論理」よりも「感情の論理」の方が近いものであることを認識している。将来の生のあり方は、人間同士の統合、人間と意識をもった他の生物との統合、人間と自然の統合という愛すべき関係の中で、協働し、共に発展することの中に見出されるのである。

近代科学は、原子に至るまで深く探究し、さらに深く人間精神までも探究してきた。このような深い理解は、新たな精神を育むものである。こうした深い洞察によって、自然に関する知識は、新たなヒューマニズムを構成する要素となってきた。「二つの文化」という認識は時代遅れとなり、人間の全知識は、一つの偉大な人間文化に融合する。文化は、人間が創造したあらゆる価値を包含し、生に意味と充実を与えるのである。池田会長の言葉によれば、それは各々の人間の活性化であり、われわれ自身が仏(ブッダ)であるという真理への旅である。スリ・アウロビンドウ(Sri Aurobindo)は述べている。「単なる物知りの域を超えたときに、われわれは知識を

もつだろう。理性は助力者であった。そして理性は障害物である。理性を秩序ある直観力に変容させよ。汝自身のすべてを明らかにせしめよ」と。

池田会長は、仏(ブッダ)とは生命それ自体であると考えている。それは、高貴なものを好み、優しいものを好むことである。また、憎悪・貪欲・嫉妬が育まれないように、それらが死滅するような社会を創造することである。新たな世界を特徴づけるものは、あらゆる生についての解釈を発展させることや、諸文化や諸国民が共通の目的あるいは相互に矛盾する目的を完遂するために協力することである。

究極的な関心をめぐる新しい社会学は問う——「われわれの生と他の人々の生は意味を共有しているだろうか?」と。それは、われわれが宇宙に属しているという感情を獲得することに役立つだろう。その宇宙の中で、人間は有機体として存在し、また、象徴的な文化世界における個人として生きているのである。

人間は、新たな目的の達成に貢献しつづけるだろう。そして、自然と人間自身とのさらに大きなコミュニケーション

ションの可能性を発見しつづけるだろう。アインシュタインは、自然への洞察と人間への洞察の調和を主張した——「宇宙的な宗教体験は、科学的研究にとつてもっとも強力で高貴な主な源泉である。われわれが体験できるもっとも美しくもっとも深い感情は、神秘の感覚である。それはあらゆる真の科学の種を蒔くものである」と。

漆黒の闇夜の中で、人々は光を探し求めている。そして、もっとも強く求められているものは、人間の意識の夜明けである。人々は、永遠の過程の源泉の中に存在するものを世界のキャンバスに再び描くことを熱望し、またそれを再評価することを熱望している。現実や想像から生まれるのは、未来の王国である。将来、人間は、文化のダイナミックな担い手として自らを高めゆくだろう。人間は「今日の川」を渡り、まだ生まれていない「明日の岸」へと船で渡るだろう。未開拓の地を越えて行くことは人間の特権である。それは「到此岸(Paramita)⁽¹⁰⁾」であり、あるいは『般若心経』の一節によれば、「往き往きて、彼岸に到達せるさととりよ、幸あれ」⁽¹¹⁾なのである。

池田会長は、われわれの精神に光を当て、啓発してく

れる。そして、慈悲、知識と美をもって人生を拡大しゆくよう促してくれる。池田会長にとって、人間は他のあらゆる人間、あらゆる生物、あらゆる出来事、あらゆる星、および無限の永遠性の一部なのである。かれは妙光菩薩 (Bodhisattva Varaprabha)⁽¹²⁾ である。かれは、荒れ果てた世界の中を、輝く原初の光をかかげて旅をする。そして、『法華経』から現世的な単純さを剥ぎ落とし、『法華経』を最も高い次元で理解し、宣揚する。池田会長は、新たな「精神形相 (forma mentis)」を求める永遠の巡礼者なのである。

タゴール (Rabindranath Tagore) の詩の言葉でいえば、「旅人は 自分の家の戸口にたどりつくまでに、他人の戸口を 一つ一つ 叩かなければならない。こうして、外の世界をあまねくさすらい歩いたあげく、ようやく 内奥の神秘に到達するのだ⁽¹³⁾」と。

偉大なる「先生」は、われわれの記憶の中で失われた「水」をもたらしてくれる。われわれはかれにしたがつて泉へ行き、その秘密を見出す。かれは、われわれのフ

エリーポートであり、われわれは、向こう岸へ渡る乗客であり巡礼者である。われわれは何かを乗り越えるために生きるのである。

訳注

- (1) 堀日亨編『日蓮大聖人御書全集』創価学会発行、一九四四年版、一一四三頁。
- (2) 「法華経法師品第十」の文。『大正蔵』第九卷、三〇頁下には、「我滅度後。能竊為一人説法華經乃至一句。當知是人。則如來使如來所遣行如來事。」とある。訓読は「我が滅度の後、能く竊かに一人の爲にも、法華經の、乃至一句を説かん。當に知るべし。是の人は即ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行するなり」(細井日達編『真訓両読妙法蓮華経並開結』創価学会発行、一九六四年、三八六頁)である。
- (3) 衣裏珠の譬えは、「法華経五百弟子受記品第八」に説かれていて、七譬の一つで、貧人繫珠の譬え、衣裏繫珠ともいう。ある人が親友の家を訪問し、酒を飲んで酔って寝てしまった。その時、仕事でできた親友は、友人の衣服の裏に無上の価値のある宝珠を縫い込んであげてから出掛けた。友人は、酔って寝ていたので、そのことを知らなかった。

起きた後に、その人は各地を放浪した。しかし、衣食

を得るのも大変で、苦難が続いた。後にさきほどの親友に会ったとき、親友はその人のみすばらしい姿に驚き、苦勞をしないように衣服の裏に宝珠をつけてあげたことを語った。その人はそれに気づかなかった自身の愚かさを反省し、素晴らしい宝に歓喜したという。

- (4) 中国宋代の詩人・文人官僚。蘇東坡と号す。一〇三六―一〇一一年。二度にわたる流罪や投獄など厳しい生涯を送ったが、その詩はのびやかで明朗で、宋代の時代精神を代表するものとなっている。流罪中の作である『赤壁賦』が有名。
- (5) 「法華経如来神力品第十」の文。『大正蔵』第九卷、五二頁中には、「如日月光明 能除諸幽冥」 斯人行三世間 能滅衆生闇」とある。
- (6) 「大正蔵」第七卷、九七九頁下に、三蔵法師玄奘訳の「大般若経第九會能断金剛分序」が掲載されている。
- (7) キケロが執政官になった前六三年、執政官に立候補して落選したカティリナ (Cicilia) が国家転覆の陰謀を企てた。キケロは、コンコルディアの神殿に元老院を招集してカティリナを弾劾する演説を行い、陰謀を未然に鎮圧した。カティリナはローマを逃れたが、まもなく殺された。

- (8) Cath. 電子管の電極の一つで、陽極と陰極の間に装置する金属の格子である。電子管において、目的に適合するように電子流を調節したり制御したり方向を整えたりする役割をしている。

- (9) time-binder 次代の人々に役立つように、さまざまな経験の記憶や記録を伝達し、保存するという属性をもつ存在。すなわち、人間のこと。

- (10) 波羅蜜。波羅蜜多とも音写する。古くは「度」と漢訳した。度とは「渡った」、到彼岸とは「彼岸に至った」の意味である。迷いや苦しみの此岸から、涅槃の彼岸に到ることをさす。また、その完成・到達を意味し、転じて絶対・完全の意味ももつ。さらに、悟りに至るための菩薩の修行をあらわすこともある(六波羅蜜)。

- (11) 英語原文ではサンスクリット語で記述。[gate gate paragata parasangata bodhi syah]。これを音訳したものは、「掲帝掲帝般羅揭帝般羅揭帝菩提僧沙訶」(『大正蔵』第八卷、九四七頁下等)である。

- (12) 「法華経序品第一」に出てくる菩薩。文殊師利菩薩の過去世の姿。日月灯明仏の高弟で、八百人の弟子をもつ。灯明仏が法華経を説いた時の対告衆である。灯明仏滅後、八十小劫の間法華経を説き、弘通した。灯明仏の八人の子も、妙光菩薩を師として成仏したという。

- (13) ラビンドラナート・タゴール/森本達雄訳「ギタンジヤリ」(『タゴール著作集』第一巻 詩集I、第三文明社、一九八一年、一五頁)。

(ロケッシュ・チャンドラ/インド文化国際アカデミー理事長) (訳/くりはらとしえ)